

4. 刊行物・主催会議等

気象研究所の研究成果は、気象庁の業務に活用されるほか、研究所の刊行物、研究成果発表会などを通じて社会に還元している。

また、関連する学会や学会誌などで発表することにより、科学技術の発展に貢献している。

4.1. 刊行物

気象研究所研究報告 (Papers in Meteorology and Geophysics)

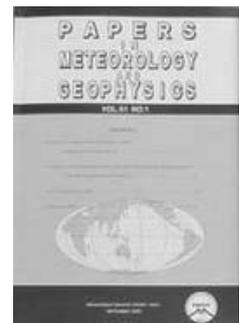
研究成果の学術的な公表を目的とした論文誌 (ISSN 0031-126X)。

気象研究所職員及びその共同研究者による原著論文、短報及び総論(レビュー)を掲載している。主な配布先は、国の内外の研究機関・大学、気象官署などで、国立国会図書館でも閲覧することができる。

平成 17 年度からは 独立行政法人 科学技術振興機構が運営する科学技術情報発信・流通総合システム “J-STAGE” に登録し、オンライン発行とした。

J-STAGE URL: <http://www.jstage.jst.go.jp/browse/mripapers>

平成 22 年度は第 61 巻を発刊し、次の論文を掲載した。



第 61 巻

- ・ 高木朗充, 福井敬一, 山里平, 藤原健治, 加治屋秋実: 噴火準備期における伊豆大島の相対精密重力測定
- ・ 新堀敏基, 相川百合, 福井敬一, 橋本明弘, 清野直子, 山里平: 火山灰移流拡散モデルによる量的降灰予測—2009 年浅間山噴火の事例—

気象研究所技術報告 (Technical Reports of the Meteorological Research Institute)

研究を行うなかで開発された実験方法や観測手法などの技術的内容や研究の結果として得られた資料などを著作物としてまとめることを目的とした刊行物 (ISSN 0386-4049)。主な配布先は、国立国会図書館、国内の研究機関・大学、気象官署などで、気象研究所ホームページ (<http://www.mri-jma.go.jp/>) でも閲覧することができる。

平成 22 年度は、第 62～64 号を発刊した。



- 第 62 号 「WWRP 北京オリンピック 2008 予報実証/研究開発プロジェクト」
(齊藤和雄, 國井勝, 原昌弘, 瀬古弘, 原旅人, 山口宗彦, 三好建正, 黄偉健)
- 第 63 号 「東海地震の予測精度向上及び東南海・南海地震の発生準備過程の研究」
(地震火山研究部)
- 第 64 号 「気象研究所地球システムモデル第 1 版 (MRI-ESM1) —モデルの記述—」
(行本誠史, 吉村裕正, 保坂征宏, 坂見智法, 辻野博之, 平原幹俊, 田中泰宙, 出牛真, 小畑淳, 中野英之, 足立恭将, 新藤永樹, 藪将吉, 尾瀬智昭, 鬼頭昭雄)

4.2. 発表会、主催会議等

気象研究所研究成果発表会

気象研究所の研究成果を発表することにより、気象研究所の研究成果を広く一般に紹介し、社会的評価を高めることを目的とした発表会で毎年1回開催している。平成22年度は、平成23年3月1日（火）に気象研究所講堂で開催し、以下の研究成果について発表した。また、気象観測鉄塔が平成22年度に解体されたことから、気象観測鉄塔に関する特別講演を行った。

報告題目

- ・台風に伴う竜巻等突風の発生機構—2006年台風第13号に伴う延岡竜巻の数値シミュレーション—
- ・気候研究のための長期日降水グリッドデータの作成
- ・数値モデルを用いた地球環境解析
- ・衛星データの利用技術に関する研究

特別講演

- ・気象観測鉄塔を振り返る

文部科学省科学技術振興調整費「渇水対策のための人工降雨・降雪に関する総合的研究」シンポジウム

気象研究所を中心とした産学官の約10の研究機関により、文部科学省の科学技術振興調整費による「渇水対策のための人工降雨・降雪に関する総合的研究」を、平成18年度から平成22年度までの5カ年計画で実施した。平成22年度は、この研究課題に関するアウトリーチ活動の一環として、以下のシンポジウムを開催した。

国際シンポジウム「International Symposium on Weather Modification —Recent Progress in Precipitation Enhancement Research—」（専門家会合、日本語通訳なし）

日時：平成23年3月3日（木）～4日（金）

会場：エポカルつくば 101 大会議室（茨城県つくば市）

第4回公開シンポジウム「変わりゆく気候と水資源 —最新の人工降雨研究から観えてきたこと—」

日時：平成23年3月7日（月） 13:30～（開場13:00）

会場：高松サポート合同庁舎 低層棟2階「アイホール」（香川県高松市）

主催：「渇水対策のための人工降雨・降雪に関する総合的研究」事務局、気象研究所

共催：国土交通省四国地方整備局、高松地方気象台

【基調講演】

- ・気候変動と四国の降水特性（森 滋男 高松地方気象台長）
- ・四国の水問題（高野匡裕 国土交通省 四国地方整備局 河川部長）
- ・四国における人工降雨実験観測（村上正隆 気象研究所 物理気象研究部 第一研究室長）

【パネルディスカッション】

『人工降雨と四国の渇水対策の将来は！？』

司会：藤原有衣子（一般財団法人日本気象協会）

パネリスト：田村寛司（香川県 政策部 次長）、木原光治（四国新聞社 編集局 次長）、森 滋男、高野匡裕、村上正隆（基調講演者）

さらに、下記のシンポジウムの開催も計画していたが、「平成 23 年（2011 年）東北地方太平洋沖地震」の影響により、開催を中止した。

第 5 回公開シンポジウム「変わりゆく気候と水資源 ―人工降雪技術の実用化に向けて―」

日時：平成 23 年 3 月 19 日（月） 13:30～（開場 13:00）

会場：日本科学未来館 7 階 会議室 2（東京都江東区）

第 8 回環境研究シンポジウム「わたしたちの生活と環境～地球温暖化に立ち向かう～」

「環境研究シンポジウム」は、気象研究所を含む、13 の環境研究に携わる国立及び独立行政法人が参加する「環境研究機関連絡会」が主催する公開シンポジウムで、毎年、決まったテーマの下で、参加する研究機関が成果の発表を行っている。このシンポジウムは、昨年度までは「環境研究機関連絡会成果発表会」という名称で開催していたが、今回から一般の方にも理解いただきやすいように「環境研究シンポジウム」という名称に変更した。平成 22 年度は平成 22 年 11 月 17 日（水）に学術総合センター（東京都千代田区）において開催され、気象研究所は、以下のポスター発表を行った。

- ① 気候変動に及ぼす炭素循環の影響 ―将来百年予測について
- ② 気象研究所地球システムモデルについて
- ③ 地域気候モデルを用いた日本の気候変化
- ④ 超高解像度（全球 20km、日本域 5km）大気モデルによる将来の極端現象予測
- ⑤ 黄砂予測モデルの高度化を目指して
- ⑥ ニュージージーランドローダーで観測された成層圏エアロゾルの増加について
- ⑦ 日本とその沿岸における落雷頻度の統計解析
- ⑧ 気象研究所の研究活動